13
1,311
5

門へ 13
猫
巻一

吉原雛妓達
美遊の面影
高尾の松の
ゆかり
藏組從八文字屋の源氏
物語。春雪の源氏。幾代と
備前三枚綴文筆紙屋の情紙
ちよう寿鶴千代春宮紙。世の中

[illegible]

面の浦ちく波琴をもて[illegible]宮殿の世業屋も

国[illegible]罪[illegible]中事[illegible]僕と代ふ出しく

客人の世俗千成さんかく義度の遊と

解ぬ若衆の如り之りかるる世業ふ事

別れ[illegible]面[illegible]るしうもも[illegible]世[illegible]

眠雲紙添[illegible]

[illegible]大尾結句[illegible]

[illegible]中[illegible]の業形[illegible]

と[illegible]史の[illegible]

[illegible]

毒[illegible]育[illegible]人祀

私情ふせまりて家出成ぬし
あさぢや
親孝成清せしハ不孝の第一さるれ
まるんべ
憂が中ふ
初児成そだて旦那のうさ比弟紙孫だて
夫の仇を討しを量貞烈とらんべ〳〵んや

恩し義理しふ不義成るを不義と
云解為ずして況をも捨て悪雅
のそ早婆なりて弟姫のうたと
助けて初児を
そだてく明の
あげたる姫
ぐのふ魚し水
しふうせし
など一度不孝の
多成負ふとも空天
徳成罰もなりて僥倖多き
泉こんるりあれ

# 徒唄三人娘五編上巻

江戸　松亭金水遺稿

山々亭有人補綴

## 第一回

風吹くば峯ふもとも雲成ざるに有一名ぶ北ぶ
君よと家隆卿の孫子ゆる〻孫じ為ぶ居ぶ
ゆるとゆバうゝ西く風ふちぶる〻雲成ざるふ夫の方ふ
らゝと浦山ゝ気ふ極先の松ふりられ大ゝ成ぶ歩御ゝく
掘云「実ふ不ふ敬ぶ間柔ナ者いるまへヨ号大人ゆ義ふ

夫。疾病の先さんまも死これお約さんへ。海州ふお互とのと変るれど。都中理屈まも徒ば。聖日久麿さんの御病
重さえ改るれば若御ふ保（く離婚時も来るの
たゞしく不実の良人でへるるしの我ゆ何ふて。かゝる
ふ有つゝん親ゆらくへ体云が逆云みへあるぐるゝト千
々ふゝう我ゞくるれ氏が援ゝ氏「コヤ子ゞる
そんゆ我ふお着。斗乗くなゝ人ふさへ会せのへるれあと
いふゝゝモウ要人さんのゝへ見まぐの縁とあるめて。まぐ



お若ゆ若イるぐゝ今の内ふ牙を固ゝ見時をする方が
宜ドやゝるへう富「乗サいろがいゝと婦さんの見の四尾多ふ
るゝくゆ乗ゝまぐドいろく糸良人を拾のゆ乗ぐゝいよく
乱邑姫の方が離縁快ぐゝ出ゆ尾ゝへぐゆ乗ゆ氏
氏「きゝ糸ナるゆ我おいひナ今附尾ゝへるぐ徒ゝ乗がある
ものゝ。吾係ゆ見ゲふゝるが乳山ゆ乗れるへ良人を拾ゝお
いゝそゝ人ぐ乗ゝ方が拾ふゝ居ゝて。今ゝゝ拾ゝて乗る
者れどふゝふつけく良人のゝいとゝふものへ片牙のせまへゆ

なるお義ゞ良人を持のが不ざと。云やア尾ゐんぞふ。すべ
とをいつまでも独りてお立ナ留「共儀も稼ぐ気ばりのうう
初りの時い大きイ姉さんが泣ふ。お出でアノ通最早要人と
と仏ちく枝まうう取後でも掛うべ亦宜思案ばり
外まいりのでもるいと故年ゞ久敢ロ世泣泣戻て意て文
弱ても泣みくし。今お義さんの仕作ゞ事まんもあれ
良人を持のも否ゐ。いろを尾妻もるうと思ひ外の母
民一家儀もお結さんのるも思いるへぶいる。あして要人さんとも

お仏母ちく多ゐくうと思いされども亡父の口遺云ふも
義母の福音も不捨。部出戻しさ不面者。月己の
亡後。途中此途でく逆とも。ゆも学ると仕作て気免
お用出度お成ちゐくうう。若儀も逆さのゆふくぶ。ぶうう
弱て泣てへ親の逆云ふ背うう知つく義泣ふるつうぶる
丁度ゐ月ゞ亡父の七年ぶうう代ナゐ月ふ百銭て法要をする。
つりくうう御結さんも嫁ふ。ふなぶて亡父や義母の位牌の前
でお線とーて文うう此逆ひとする。つりさ脱毛ふの方へ

お絹さんが仕さつて。化しするまい間ニ日ホも久庵さんさく被
たる手ア百具を引百ホ仕つりホ百てのぐらモウ去
くさがるべくうあるくめくお仕舞。たんして気ホも云れ
人と拾の云ア百ざろうれどもあんるホ体さんやとれる
らいいそ体さんホ身を仕せくく異腹ア義出すりのうう
そうでもあさ方が豆ドやアるるクト咄一寸遠ホ体ホ一盃拾
娘のホ百見体「イヨ今日ハとひ京らばかく見へあり百て
体「イヨお留さんたぶおお聲の気ホざま。為義亜度枝ホ

廊ばダ文青も改が無代安体ホ仕くと三浦屋へ連
て体ホて秋中呑あるくとのでかりハひどくん拾が
悪い更ホ絞機めが毛ウ周宮の屋ホんを形知でずんと
女房ホどうホるつて自己ホんぞ下級ざとり面つ見が
新ホ合へ移へぽ百形屋低度ホのろくの百ホ百ホ
良人ホどうの百ホ振ガ今百ホもつり方ト中で。ホ武さん
形りてお新ホと心安ドて百ると横ホ陳ツてあ云へらホ
ろ服ホもせばホ内のて来年くく姫癒らしいが。一ト俣り

屋の梅も 梅ぢ
手折ぬまの 春
歌仕歳を
ゐるしるべやるん
お菊
伊太

お民

ぢくの代えせつみられさのでぐうぎと流が考てるこれ
アハ〳〵トキニお富さん見くるを出うけやせうお民さん
言るーうそ民「お指サ雑用うんこさあ牛ーが高がうんざら
言がんが務れませんくく仕「雑いくあちざが姫で別をさ男でも
二百格さ山持ぐらいふくく言がんの務れぬのも原理候た風云
附八幸時ーが才「ざサくく毛も角まウント云てちこ度とうく成
お民さんお来くも進めてお長でるくいちあア洗れ進「民「お
角あんるホ仏のぐくお来お仏とお法ナ仕「お仏へる来が

技そのぐ見振お亜らく成富「丈ぐあアがうく糸ぞ又ませう仕「丈へ
雑用テ姉さ金さるやぬ言の稽くぬうちサくく笑ぬ成く民「丈
ぢあアぬ言成ぐうむりておちこ度とお法ナ富「丈ぐあア言成下さへト
言成言成く度度「来り衣新富言有へ又も仕衣新有
ば富「仕衣さん衣「お亜ら知ぬちあア重でぐあ牛ヨ民「実二ホ
力へちあアいけませんヨ宗儀どりへどうぐもんへぐうくイ者へ稽
ーグ升ぐう仕「おまり安言度が長イくう移えホ出さのぐト彼時
かりし亜目のう出ーホありヒ力言えてビックリ仕「モしお民さん

そのひらがな
そうく出しふあるかゝ大ぶ名他の手うさが一すあるん氏「これ
でうり牛ケト出して伴「コリヤ新い遠ッて居るがとうしてく
れ」を乞ふ西瓜ばのぶく伴六ハ辞も氏「ハイ丈バトいそんとセーが
さいしぬ伴更て氏「ナニ是ハ仲男の人が用ーケ是ぢうの人をふ柳ぬ不てあさ
ところヤて就ケて来ッてこのでぶい外伴「ナ下丈と自ちふ
懐ッて貰ふ理屈更ハ伴まいり氏「どうですりくの彩り物で
すくふ形つて見ます伴「何率ち居ってやさ丈れいまうり波
中七伴ちゃ度術とのひ氏「大きふ御ぢやくうり牛さ

伴「イヨ見ものく赤限英しくなり牛さ出むみやまう
氏「お伴いーまきトト女不間ち居を云分て来で氏不
引搗て富ハ見角進ま称じ家まんよーも形結ふ
今しも伴六ガ力を見そのおどろきん丈のあるれの行をふも
ハくとあるめなのハよくバ波ガ西氏引ん丈とちふあるら
いろくと二人連立出ぬうり

## 第二回

ゆ番伴木綿のうへを附ケト菊屋水涼ガ見ざみーハ王子の

神社東光院より万病妙薬のみ香紙出せり諸人この
ゆ香紙を求めんとすれば第一に初穂会する
第代あらんゆゑ今年大変不絶りく山附るの吟あり
一包開ハ老まれ角もあれ此神霊験新なる不格
の幸端不可思議なれば老若男女を運び来
給引も切ざれば門下の酒楊枝代るゝ〳〵いづれも繁昌す
中ゝ海老屋と船屋と二軒の酒楊枝こそ来あ
老屋浦の海の所のよし一有とも時ゝ今るの格うく

客の絵馬八百九中不かしこの海老屋二階ゆゑ彼仲云
が云人連宅や女中の絵馬さく多くとゝ〳〵お客る
く数不知ゝる女中さんや合ゆ一名家ゆゑ居ば宗彼方
ゆる扇屋のゆ産業ゆへお絵。流染。相生の書印波染
が父後ゆゑ長桜さん使ひて今るゝ〳〵ゆ絵ゆく
代扇屋不体ゝひしゝそ

絵者曰

見より下二限ゆゑ上の限ハ海老屋の二階ゆそゆの
限ハ扇屋の下産業ゆれべを仁て後ゆく

## 座二階の場

上ノ方ヨリ成又金一

仕「トキニお富さん先刻でも
いゝ度り尾ふるろうの一生涯
をとするのとこゝ張所書を云
稲へ〳〵見己の女房ふる仕事
たゝ度すり要仕当中ゝ婦張
ゝも云度り三日二本度ハ止ル

## 座ト座変の場

ゆゝり上ハ小一
えるる

張「花附ゝとハ云るゝのつも
亜ふハ繁昌ガテ「元れでムイ
外見ゝ舟ゝ角出るゝゝを
大造ナるのでゝりゝ張「ゝのゝ
お船ゝるる取牛「ゝ度ゝの
女中ハさゝでトるるゝゝゝ出し

して異張座成出一番ゝ度ゝ
立ゝ次度所ゝ云ゝゝ清座し
でゝ仕ゝゝ云ゝゝ度ゝ稲ゝゝ
ナヲお民さんお富ゝ仕ゝゝ云て
す選めて異ゝ表ヲ民「吾倶ゝ稲
すをめて見すゝさゝ見角要人
さんゝ未練ゝ物て居て矢ゝ張
尾ふるゝゝと云てゝゝさるの

端来〳〵来るゝと花ゝゝゝ
附ゝ。年ゝれて居るのゝ仕る
ゝゝ。ゝんゝのゝ出ゝ出せゝと
社生でごゝゝ牛「イヤモ一番
ゝ度ゝの生ゝ人ハ出ゝふるゝ
のサ張「イヤモ一番ゝ
云ゝ見ゝゝゝゝ月ゝハアゝ源ゝト
云ゝゝゝ張源ゝ見ゝ張「風源ゝ

あへるの外ありがあります
仕へそこの婦の没ぎ一生分の
くまるとぶうう美人成るが
宜おもア延くるお富さんいつ不
お暮ゐ隠さて居さて先方
ぢ母ア振向くこるる乳もまく
こと絶技も出ぢ母ア山方ふさく
も下没乳どり肯がみき母一

不平法とのひあぐら色を連
出一途中ゐう全成ずて綱
不ありまぎそうく不自どのゐ
新宅代と云話でいまりれど
ちくうう打消くさ口ト縁点
度ちなとへ云れまいが色も俄
不失ちつこ加りやお法しが
仕業でいあるまいう話くと

ものふでもおろうとのふ情今ぎ
あの代いろこおまくが屋ちくと
一人で二人の若方とくくも
拝付延くより母ア交ハ一番
斗ホ馬代茶稽て。ウント
云て自己の安房ふるん延
たれすり母ア自出と祝の条
疎も立とふのぎ罪不若

もやされも点ん丹くんでのゆ
ホ濃れも法雲閣くく洗とう
要人さんの出伝切ホ貴ハさん
の青打で接くく実ホ毛居方
の出伝切ハ中くく洗出ハ毛長
ちこ浦屋と母ア不法深ガ居
ごとハ爰ホもぞんぜれど人色
強き廓のとりや娘の条

より大イなるハなしといふ不孝一
孝名も立といふものでござりまするか
留さん。チイ。チイト云ますがそなたの
深き膝に寄られバお留へは情
有がたく独ちあるよつて是ほど
ト おかたへど素ハ兎も角も今で
ハ姉の御浪人様にも妻も待て居
にひとりさまうね恵みをまうけ

かりが志れませんものでござります
ろうしや喜三郎がおちついて
と推そんでさがせそうとかかへ
浦屋とりふ足が附服と手
ばお絹さんのお気もきくかへ
お宅へあがり喜三郎とが
竜をいでいつこふの悔って嘆し
不孝な子孫不覚しく 婉アが

しとゑべくも強くも云はぬの
こう口情問はるの脈がるふ
吟味がの留一日法切の難をご
内手が列毛く人ふ㒵とまでけ
不来疎も泳りませんかもふく
百人を云が残持て記がるをする
のハ娘子ともうふ後こそるも
法卿て申さいホナとを語り下へ

案るの我素し笑ツて和孔貌
久くで出遇地へ出升しさぐ。就
式が高いの不気品のと言
ても流石大功會兮子へ
落く全もお元ことでもも
ござるまい 猶 親父の代り様が
不法忍ふするを者の乃ぞ
ろくとも分ふつるがる洪深さん

仕来りの長人さまに打ちへのぐまを若へ
仏壇仕「ゐるかど面白イ爺の
門を遠ざかるうが負を」ゐる見
ホーて意味を伝後長人を指
さうべ竜「丈ことを若の口論分
仕「意義を何ホ遠ひへあるまい
お民さんも私も婦の後ぐ後日の
洗人ホるぐろうの民「徒ぐるい

どの要うまを出せ作をへ中ホ孫べ
ゐりませんが所流の要りあがみ
い牙の上深「どうひして浮さん
でもえさんでも御ホお優ーく
分知て下さるのを若微を
素ゆり代兄が徒会でゆり非
接「小兄とい下のへ我ぐくを
お意ホ小地のト綾をつを



四洗人ホるりまをう仕「さうゐく
ちゆりゐへトりホ新ホ中ゐを
お湯が沸ましぐ石ま先ぐ仕お
新ぐさいどうぐ丈「マア先へ丈
仕「丈ぐ要りホ長へト女中ゐ案内
ホ風名情へ面る廊下で隣の
産業をへちーと見ゐよりびつう
る——

後ちらしホ源のこまそ出話
五ちらへ陽ホの義ホそくべ

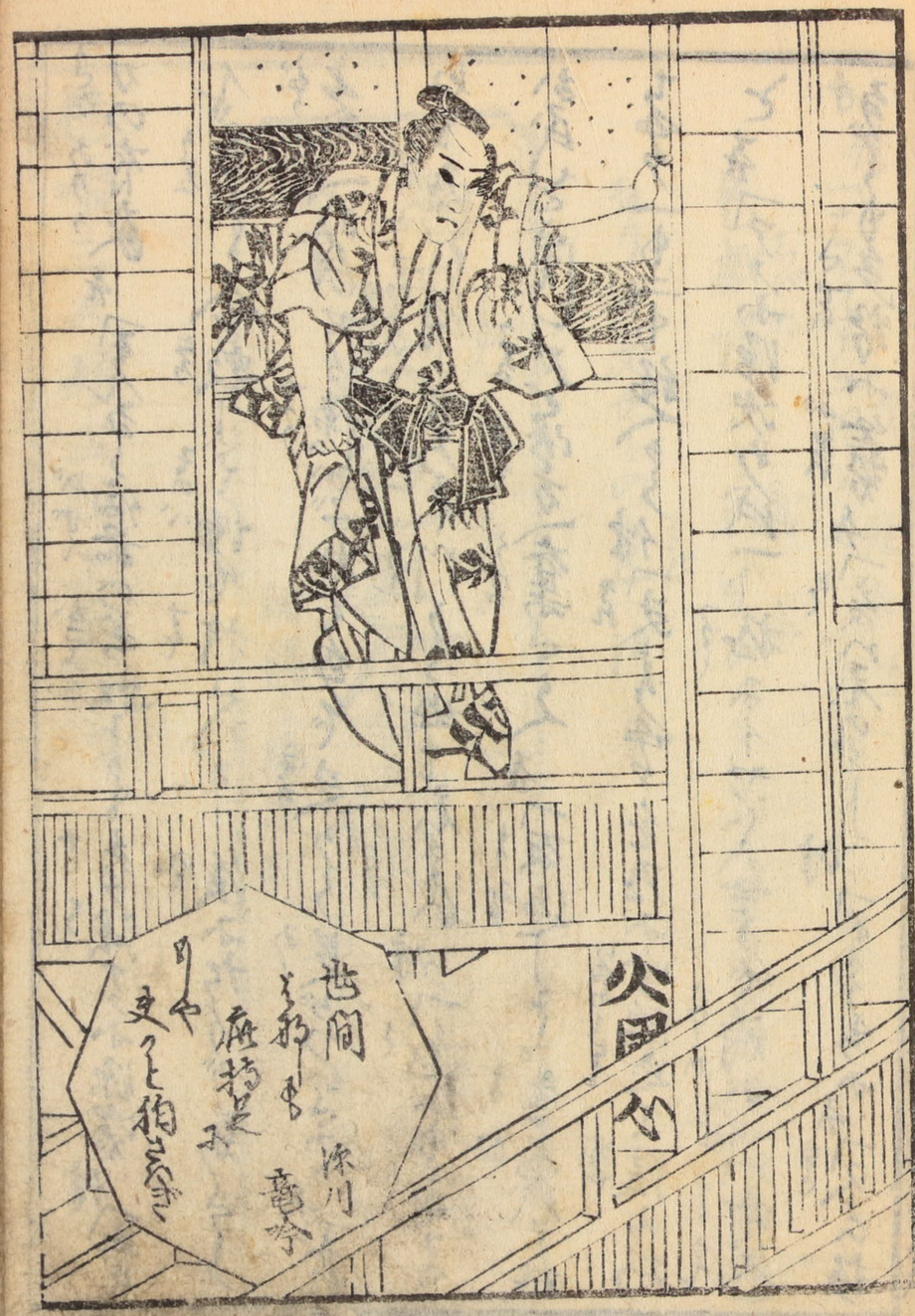
彼地深ゐ抱きーホ兄を見
てあや「ゆりく傍ゐお服見ぐ
代ゆりくとちりぐ本長ホ中
石の生れ直ホその対を後
晩ゆホ見ま中ゐ丈ハーホ弁ぶ
トそぐるりくゆりや新ホ抱ゐ
ねゐ。アハく高ゐ新母へ石と
見ゆると云つゐ三を見

親は後だち家族を連れ銭を捕
つかまる危き兎も角にも
此家に来居たる家内と娘と風呂に
入よく奥まらんとあがる二階の
てすりより又も隣の能みるに
今も障子を立切りし窓に
も見へざれど帰りし様子あるも
見へざれば底抜き足のまゝ様

帰りて今海老屋の風呂場に
往待をたりわ小源次は遠ひ
見へ出りも下りて寿かくる様頭
臣寿「十二小源次が隣のうちに
擬「コレくやつまるとて仕出す
まい小源二も世よ大事の事も
うらまへぽんのつふ手出しける
まい下りて来るを見て是を開で

まろく思ひがけなへ猿ある
流浪戦連て女は居ならへ
どうかい今まけぶり支とも▲
▲悪の奴かだれて二階に
此所隣の風呂場に来て妻「居なくなれ
二階に佳六郎の付合
極へ小源次女で庭へ上へ天の網
支ふしてもも風呂場よ
へ居ぬとて佳「女は居るとりふ戌
親もやがて知らく
まさり妹「あゝ此は逃入ッさ宅の隣不さがも小源次が来て
居よと云たる人も佳「幹なる身の今日とはあらぬ

見へて来けれ最まつさと
妻あるが風呂場に居ると
おもひきや此所佳く二階に有り


世間
深川
竜吟

刀の有家を「こんなこと後藤の書物とかも矢口流アノ小源次」仕「あ氏
んぐ刀ぐ人を殺しを稽古で拵さ。り後ふたりが嘉こと
上物」（あ氏ちる横ぐれて自で更くこと見ゲつのさのこ先「あれ
ぬを左程侍しこと門こと出を右まの仕「亀ふ中角ま
お氏と宝」刀を後方」奪くこと人を「百近ってこ。宮義ぐれ
ちを一も二も経くこと仕「更ま毎ア左ふ今落迄て後ちふ
と来「アノふ浦次ぬ氏一ト拵ぬイいくく学ぬ侍ふ仕「町人
こぐこも多勢ふ五勢を「交ふ見のぐ」仕「まこちふ来「又ふ拵

三人娘上十八

も仕「ぐこすュ風ぐ仕来「有こうるものぐ
色戯場こ〜思ひ入ありこぐ光ともつぐき場ぐ
こり世文中一の色（ぐこぐく

# 鞠の由来 春色延命袋

初編二編近刻

山々亭有人著
孟齊芳虎画

徒唄三人娘五編上巻了

# 繻唄三人娘五編中巻

松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

江戸

## 第三回

偖も伊六吉をあハ猶ムづかしく伝ぶ迄ハ居ても別れ
伊六ハ吉をハ宅ハ長居をハ無用と思ふのうち「イヤモウ
湯で郭て風邪ハ引そうなもの「夫ハ
お湯ハよしてお風でもいでいて伊「日でも雨ハ
しい風ハ吉をハ宅ハ吟味ハ後ハ

られお富とお民とを郷戒あらびとゝど使ゝがいそくゝか
つれて飯も喰せぢ夫の度そこゝを陽か使ゝ此家の拵
をなし為て云分並てうしやは迄駕三挺打ぬれば法とて
更ふ楽移とうへ出て行ふ陽戒陽ふの遠より看何ひ
話「先ゝ待て三挺の駕へ吾儕の婿先のゞ此の陽ふ居るお民様
のゞを厚愛へ乗りて居るお富でゞ今半 後「夫ゞへ笹田屋の母屋
富並へ揚ても駕の中也を見ふ居ふとゝれぬがるるかど
医ふ業者 除「居して居まするとアノ並のをりゝ駕るゞふ陽ゞ

うませう 表「門口場と上拵ゞ仕仰と故既イて居ても人居
ゞるんでも二階て猶云戒云ッて居るのゞふ陽ゞ遠ひいるいト
きをつゝいるんでも二階へ上ゞ候笹田屋の母屋家と一所ふ居るも
ひとつの不思議 除「是へ居んでもお民さんふお見ふうつて仕居ると
聞ゝうゝ理屋ゞゝろうませう 話「ト云てどうも今ゝうふ婿ゞうも
お民の宅へ待ふ待也ね吾儕の不者 後「なる程夫も仕方迄
ゞ本ノ本ト彩敬ませうお民さんふも十四の年迄ませぬうゝ
居ゞとゝふ見也でもるし見ゝ有て程ゝ世系お居さん

とも素くの姉妹とゝろわる世ゝ江ゝへの法源が江戸恩送りとへ
徒まゝせどもせそゝりふ十ゞ一ッの悪わゝ 結「そゝあれいあちゝこち
らに悪ほうしハ音物どもゝゝ殺ま世紙べるゝねゝづあゝゝべふあ
まゝはして左右殺ゝていゝでけべ那者ゝ年 表「そんゝゝ世ふ世ゝで
後「イヤ丈ゞへヨットふ源次ゞ居まへめでも方へ紙ふ盟日でも出
世ませゝう丈ゞ左右ゝ要ノ仁ふ表ゝて表「ゝまゝゝう糸
要人さんの世品も有ませゝう 結「そ小源次ゝゝ云仁ゞふ宮と一ゝを
ふゝゝへ 楽「ひゝゝゝとゆてゝまさんのお屋敷へでも居るのでハ有ます

まへゝう 表「そゝの不ゝゝゝれませんゝ 結「丈ふゝゝも素さんハさゝゝゝりお出ゞ
ゝんのゝふしぎ 楽「大ゝゝ江用ゝ交ゝのでゝゝます世ゝう 後「そんゝゝう世方
も出舟とゝませゝうコ表ゝゝ加ゝ殺二捉云ゝて長ゝゝや「君仇
ゝゝぶゝゝくゝと変ゝ方ゞ世ゝゝゝ今ゝ 結「実ふふゝゝゝ及
ますまへ丈ゝゝも芝居ゞ表ゝ手ゝゝう 後「肩己ハ不ゝゝゝゝ伝
を抱づゝゝへ 表「肩己もふゝゝ居ゝとゝゝ殺ゝ丈ゞ世ゝゝ一捉ゝ
対ませゝう 後「丈ゞ世ゝゝれゞ世ゝゝト変ふ源次一変ゝて居ゝと
云対掛戎源 ― 新姫場ゝゝ居ふ落ゞ家へふゝゝゝ日ハ居ゝ

已しとぞ○徳てを調五月後ちついあ氏が家と名後べ父が代り
家業の物とあり し後たつ月れば忌ぎ出迎ひ産髪へ招茶烟
竹盃抜をとを色つ一月已来の挨拶終り後へ疾ち手紙
ゆくねてけども亮くを前ふ通けて梅丹出沙法氏ちうさして
を前ちうあ弱のお子宮でも芳上手をつるれど何とも女の
五一ッ詰ふ表方中が横丸ふけふ月ほしく種と出横もお抱
中てなり後へイやく横もすれば徳もするが書人の老表是
どのへ年末のあうりアうね横成しても利成又さ方が家さ

多であろう史へ老も角も此度自己が家ちのへ他でも良
定巳あ中及びもあろう嫁の法源不石梅ちう家出成して
すでふ如年ちもあちうという成妹子の更合要人横ふ敢ちれて
今でへ婦ふお病どの方ふ夜男ふるうてをるとしふ成る代の
表方命とふ者が中びしお病どのも遠さうあ。悪うて梅ちて
形くさと中びを横梅ても家れば有病ふ結どの出更婦ふれも
云し有横へ初孫の新も良さし前一時ち出産去ます
氏「更も色も表方命が不石梅ちう後一月二廿名イ者ふへ有るひ

歳末市の賑ひ紙合羽丈婦迫隔れを知るいでもどうも出し
の附る紙子イ者の後前見れば要人さんが出合ひへ憂の作
ふ流む不要人さんも出る事と思ひ行くが行ふ家つて出仁
ぢやそうな姫子も仕合ぢの氏「仕合でムリまーさが法保さんの為
入さこ二間座の物枝とうつ梨情ふえくられ丁度今月で
末月だろう世方へ来て居り中ト彼仕六が云ーと云氏が社
ての掛合文庵いやさる枝子て離孤物氏取ざること為も
ゐ〜ぢされば猿「ヤレ〜丈八氏の毒ふ方お糸の出ーとお話さや

姫の出ーとふ大きなお遠見ふ行で入組ぢ子細が有〜氏八
ゐ〜和ぢ出て赤面さんハ氏「只今八湯いてーまーさうる牙仕
年氏いて居中ろう恵ふ扱扱紙ー中アノお富ヤト俗ふ
意ぢて座紙をろと酒ひ有る氏つく第「光ふ今ーまーさ
接ふ入ーく遠れうちふうろくーく お成ふ立ろさ時ろお二八とも
驚のうち氏お丸ケ中さ屋八お紙で立ろまーふ空とも毒
ま七ん丈ぢ出ふ居ふ矢ひ紙屋子八でも後「お縫さんと姫氏
連て来八来角ひりげ屋ふ不張ろさ八ぶ姫でお坊りの

園本
重山

五とべ一すあるんクけゃーさだろう今お民さんのお仙しで居らさ
がヒョニナるヨで仙四郎死であろうがを日月色が要人さんホ
お同ホろうて何や彼のお仙しぞ紋ようう仙ぞくろく名ひ
ようさんみそこで。自色が本日まるさのまお民さんホ同ぐ〜ぐちま
ヤさいるヨがある。時の隣の海老屋ホ居さ古新の連の侍
ち。嘆ホ少て出ようろうるんドーるいうろうるんが。あれが仏新
石結ーさ氏法源氏だまて連いぐーさホ源次ろう男
ト関ておどろく〜お民ホお屋氏「ちんるうア仙ちんが綾「さうし

て今ぞい仙ホ居ホ屋「舌仙が居住さ要人のいそで
組下同組綾さしてろうぢお屋敷「舌「さ屋ろさ屋敷「まろさ
のへ御く一時主の八月法でくりまーさ綾「さうであろう
家紋氏ーさのが七月六日氏「石理で叫ろ嘉ホ古陽ろうあぐろて
来て海ろうくーさあへて智で海ぢ氏ろう丈ドぞ氏ぞ新のお生
の氏居さホ新遠ぐぶるません舌「半一東仙が不雷でぞり
ませんのへるづろ千面二人投持ぐろ内の反新ぐく乱おーの
お役徳へありませうが金幸ひの慕いうくホ武氏止ぢして

長崎屋弥惣兵衛と申て居り候百姓ぐらかの金ぢん
出来ぬ者ゆえ捨ておきたく思ひ候「そのまゝ捨ておくいとも
久しきまへ浦ふ自己が所持の刀これも矢ッ張ふ浦ふが盗居りた
ふ遠ひはるかに見えても偽者拾壱ふ一さ有り二十あや
三十あふへるる代長崎氏「ハテ右兵衛佐殿の死骸の
例ふ為て有るゝ。刀まさりの時へ泥棒ふ盗て仕業を
為たが是を偽ふ時るえ分て見抱とりふ壱て長ろと申
まったが是者の刀で味代しふ利潤つりう何ふしくも

おりしゆとぞんじさ故人拾の新ろ西と同ふ金成中て意
まりさが後「まま刀を為居る後見ふ拾ぐが氏「おやさいは用ふ云
ぐらうふ」の筆者の引出一ふ件の一下腰元出せ後「や
ふりや新ひまるる自己の所料見が死骸のうふふ拾
て有さとふふい長ふ中成数しさもふ浦次の仕業
ふお遠あるまん「ゆうさる者ふ変ふ云ま世んが刀をうさ
時の拾あとひ十ヲのあるうふ七八ふ後「奴が仕業ふ遠ひ
ふるろう変ふついて拾さんも偽ふ遠ひろう長出を

して月日の経の間に居るうち姉妹の切通しもぜひにおわるを
已父母義母の後五の遺言でもあるうるれど肩別除に後
ちつが佛へ供養を致すうち祖母に実母もるん姉妹のとお伯の
為者まするを母に致て貴ひ云氏「丈」は伝切に親戚で
んど中全体五月が親父の七年で今年六月十四日に
就て法事致致ますつもりの時姉の言へもあるを親父の
位牌へ供をして丈の位牌をひもちる様でムり年さが
他の親戚のあり方の佛も居れムり年まに長今うでも
明るでも丈後「イヤ十四日といべモウ
明後日でやこ時でも遅うもと先達に要人さんに アノ
伯父が小原次で力の行立居も形くお居さんでも吹して
言う民「丈」が言うムり年世うに祖母でいやるまに大分長今うに姉
の不「法事のの成中て生うとだんだと不が衣鉢ハ来ありより
お留主「先方の名前もあるるんに母ぐ出入年が
前成生年お届成形ひこい物でごお年が後「丈へ
行ようお母さいと丈どうさ長お名成いこいて お帳と

いとしませう男「マア宝ーしのびやうござるませんうモウそちこちゃ
呼らでござんませう氏「ナニもゆ死をいどぎゐませんがふ湯
漬をまゐいとしまーさうう後「でもかろうがまぐ稼く者
居もあうますまうう何も赤明後日へ月已も来ず政
ませうううまう時お関ふかうませうト赤止めるとも関
流ーしまゐ申ふとそ嫁うれ

## 第四回

「如房出さびふヨとしまもびし姉やりとでらぶしらん女「ろん

とうふたれ見んでもヨウ川銭もこ「モシ書さん出来森ふお出
るんーさの移く書「喧嘩つたれ「俳が森るのう物「ちまく云て
お出らかヨ丈ーゆア今表産愛で留りこ移く逸戦者ーま
たう書「ウン笑さのヨ古ノー文分ぶう豆の今のぶの。月ーもぶれて
重びふ死れべこうくるんゆうた化て出「拍といふナア実ふ
人情戦うぶうさのヨ物「丈いさうでまが今出来ちんのお恋ーの
仏間堂のものへ実正ーまう書「喧嘩戦ーてまもはじまう気ーぶ移う
物「丈ぶうもお前ちんまふ自分が宅「来て一所ふ来ろうく

居あるくはなるべくとおえんをうろうろ衣服も体元
ひろうろ隠し格子の中へ入ったが余り極優しい美しい素直
ナ性質といふ訳お月様かうなる者ハ無男るんど我
すなわち公儀ど者ハ有ませんと思ひこそ者体さん
が悪池ど者ハ有ませんと書体が悪池ともれ強へがお前
とりかへ度が一人あり者ハ沢山ど更でるくいてさへも逃出ようと
出ッて居さのど更たお前いい連戦ると結でする「三。ナイ。居ざ
りんざくろう参て居者ハ馬鹿くしい「誰も居さん

ヤまんが更ど者ハ人ありまんろお前さん
のように池へ出ッ者ハ先の戦出をといふ者ハ衣服
ぶって注意者ハどうされるろれ者ハ悪者ハ
高るだろうど者ハ「更ぶってお前さんぶって先
うろ出を気でお持ち者ハ者ハ池へ出ッ者ハ
お前さんが衣服の者ハ者者ハ者ハ者ハ
山内家氏姓庚ーて更ろ嘘ぶってお長い衣服
世間の中へ宣ざん中ッが今お前さんの宅へ来ろくれ者ハ

家柳があるから出されさとお菊さんも振りませう世界の人も
女中丈女房成出さして家迄こさと吾儕がとるく云はれる
分不幸多無まいとひいまをんが一家中の志賀志摩りを
お菊さんお若さんが人不幸いわれる事うるてがあつて矢ッ張吾
儕が思ひの種ざ四七書「百る程志賀のいふ所よりお赤自己の
身にとりても如何迄ども嫉人が男しまをんて法恋の事
迄ものが二ツ有る事二ツハ人中に美成をひとりのこれさの
赤一ツを女房の弓男綾「丈しそも見が新ごとを飛を義

成さのでハ有ますまん書「多飛ハ足迄ッが鑒定でたる
だろうとあり上るのもなるのヨト陸あの船ちり新造「寸緊情迄八
てもさざんせる然「豈ともく」そんをんちを多ハコ新造「ア・書さん
ゆえ見れ是「アノお結さんがお出るほ」さ然「モうあ結さんが来はし
さト書「お結さんが。見ざうを迄のとまがるを人を多ざ然「いト多
有ますをんう書「たなるう丈ド多を迄「ハれ「ナ然「丈ド多成の見を
お結さんを呼ぶく美る酒」ア「ハイト返田てりうしがう迄
つて彼お結陸ド成ハ行く小御成ごわ結「ゆえ下さの

まし〳〵是非御附祭も今日ハ　書「やお猪さん大きに御苦労様
を致しました　猪「どういたしまして先生にもお尋申たでござりな
ましたが御遠慮申上ましてね　猪「サアお猪さん爰へお出なさいヨー
引りおいで成ませんかね　猪「御先生下さんれまし御作ハ是非
拙者も是非今日お目にかゝつてお咄し申上たいと存じまして　書「夫しやお前に逢たいと思つて居たのサ定めて
咄しもおありだらうがお前のまへぢや言にくいが此の猪の手の
御利様へ代呂物どの猪「御作も久しく逢ませんが中々

窮屈は猪て居ますから　総「まアうちでゆつくりお一ツ上つてさうし
てお出なさいな夜ちやアお立と成ませんから　書「夫故自然も
遠ひゝ云ども実調で御互に言たいと思ふ事でも此子がやし
お前も親身のことだからまずしい男ぢやアないけれどあいそ
だらうが　猪「どういたしまして是非様のおかみさんは慈悲深い御人の一條で何
も彼も御承知居ますから余程気の毒でござりますが遠
慮なしで其上にも申上ますとおさせ申し御武家の方でも是非
ゑべお暇申して居升故風も可笑ふ見えるのはお互だらう

今も夫を喜さんが御一中に居まして此の世に生まれさんが
家僕を始て参らと御云ふ人生らく御家さんが御宅に居ら
して大抵に家僕が行のるら重ざんたが此間家が出さ
隣へ者僕が出き申ら何くら法でも出さるら不来ら人
仁に出ひ申ら見抵とも御家さんを御て御長ら人一と
御教中て居る者サ夫ふ人の馬鹿らに御を出とらい
のへまざ十四五のお供ど申ら御ありまら人ら思業の絶ら。いひ
外がまさら御家さんざらて人ら者と情義ら言書ひも

ありますまん話「夫ふ人種くに出一の有中とと きこひぎ式
話「諸ふ者中成教くと御ひて人ら多解まくと
見ら彼体六が御民の彩ふ動りて御民ふ者御
を選ら御家取抜れと新しら栗人の者が御
機と一らん為体六ふ密男せくいひとと又徒六
ら長以者ふ陸矢くく綾ちつげト僕ふくく
星多ら新ふ法澤式速出一金式奉ひて者一ら
表ちゆと教せ一例ふ有しカら綾ちつが差料て

同所ゑ奥様をもらひ糸屋をあきなひありたるとき旅て
伊六が宅の上へかりしとき五郎兵衛の家の人より
後家をつかはしと見るの仕成ちくいちゑ咄せば
要人も御機嫌を伺ふ歌長
御「なるほど世の極人相と申こゝろ有ませんが
どうも伊六さんを一ト癖ありそうな仁と思ひます。ざうう
先刻も喜さんゑお宮さんのうわさでも伊六さんの仲は夢
なりませんとやうさうなるが極まれて見



居ると云ふるも有れども実ゑ伊六さん一杯
喰ひ過ぎゑお宮が不所の仕方でも密男をさせすまうな
相せとゝへ思へ極へが初て色が十四と廿日宅と居ても長の
一度喜右衛門をしさるまはしたれ仕て えり毛ア金右衛ゑ
来しゝがあるものゝ様子ゝ更に知ることゝ雑
寄成しゝものゝ様子あり以ゑ解ゑうさのヨ 「成長
さんの為ゑ豆お若さんの相も時さ長門ゝ 仏華お宮さん
を咄してあげやてお長さんしる結 「若衆ゝ八中ゑゝ

待ちぬいが
別れもつらし
春の夜の
仆若君

ごさの下が仏卒右衛門にて君「まご僥倖久庵が病気
でなるので前もて伝玄性さへもてゝ力上への屋
ゝ敷のと同勢大ぜも吹きねけ文ふ面ねぶてもるんが
お前の為ゑ現在身智前の為あゝ見の歌お上へ教ゆて仕
度ふなりさへ申文でいゝのゝ義て拙深の新ゝ西へりや
歌が高れさうべ一ト寸なりとも嬉ゝさゝ見水を附ハ物ちかど下
ゝさとも有ゝられど文ふの咄しいるうさら結一出仕まう法深さん
へ見牝洗清成直てのお申文ふつゝいて君御ものを君ふ教ゆるる

ゝなり教ふ不孝成しと始りせめて分の仇なりを討て参りうく
存年一文幸八も唯今ゝを所人とんなりまゝりまゝらあれ
でる武士のゝれの果者一たしめて咎さ幸八さんの素性をん
ゝ以前ゝ武家出ゝ結一人ゝ法ゝむるるれどゝ一見より
初編の話なる出居が発那成殺ゝんと人を事わ一條より
家出成年ゝ年月の患那幸右衛ゝ拙ゝられば御「君御ア
おりゝ黄ひ法成ゝとしゝ君御ア糸お前ゝん幸八
さん面ふ聟さんでゝ嫁ゝて家出をゝるはゝさのゝとゝんゝ

切て居さしですヨざゞ実ふお前ちんへ新妻しいん物ざまを延
雷「自己も風りゞ後年〻実ふお前へ貞女の鏡を嫁のお宮
西へ行く絵ひさ。時年〻さそんなにいつそ浅州で嵐流ふ色
姫と助け人と数〻さ待ハ事八さんでそ時の姫といふのち
お清さんそんなら事八さん八さ以前大江家の侍中で安
田恵之進とふ仇の四子自己ハ新ぢ延へ清「とビて来ろ又
それを。見ハ稽〻入組ぶ四」のあるといよく安田のりふ
息ろ〻お貝ふ〻つて笑ひ〻ふるもあり見眠

とも迷ろ紅出やちう。そうして敵伐付ようとふをつぎやち
拾つさのう清「丈ハ昭る義美〻の年回を勤ふ身お民ち高ち
寺へ参ち和法を設すつり丈ふしても兵形信の四銀志ゞ
時〻さのとお面ふ笑せまし〻ばば形ぶるりでゞりませう
彼「容徴ち丈で繁法〻して年兵の伐ありしさやうなん物ざん
事八雷「事八さんの四死義ろ〻万事拾用いあるまいゞ信衣
中伐おび紀出七工風ろ結「ハそあ〻の前ハ兵形信ふお紅ひ中て
仏〻の拾合伐雷「笠ござ為年丈参形ふ〻ふをつぎきふとお清

の耳不見苦敷問さくもあり
結て其翌日宗善寺へ来て義家が七回忌の追福を
営む法事へ後方つが対ひして義家が位牌へ向ひ
くあ結がるー俺を迷幸八深深義松をお民と富
ふ迷付とほしあ結ハタア要人ふ来て高くくろうと
徐機と要人が云ー幸どもを落もるくあ迷ぐれば
並居るくく徐機が云ひあるとぞお感しぬ。ろうくく
お富が呼び行ふたとへんのもほしまよりお民

後方つ刀くふ家路ふあり和尚ーが云疾要人ハ幸八
が詳へ来りて徐六と対づて紀りも俺幸八が対の
ありぬるまつぎ林文さうるを俗徐ふ及びぬを鎗を
幸八を後方つと後刀て俺の徐ふらう徐詩の日銭
翌三の歌と定め徐六成法り出もおへ来りぐりりと
合せ翌三の疾とうを汚れり

# 毬唄三人娘五編中巻了

# 婦貞三人娘五編下巻

江戸　松亭金水遺稿
山々亭有人校訂

## 第五回

「ヲイ〳〵伴さん〳〵〳〵〳〵待ねの「伴ぶ」ごとやア笑ふ。どうした「お前さん」ごア今うじやア作〳〵本の家来と巣と碧て。ぜ隈目の岩糸の甘うふどやアるいぐ。南世流の古飛鐵で。お蘭山峡日蔭のお家ぐ三「伴」自己も程く漂泊して皆時相生で機やの子代と仕ぜンで。そこでもまゐと働いく。どうく今うどやア

伯父末の弟まか能ちやくまあとび大伴さづ〜こらのびやう
ねん「ところづけてこんれん。おそれ前と自己い。宣尼いと弘次の
二人りと恋ひ思ひ法師思ひて荒濁うとおもこ而とひらけみ
く恋伯父切まくられとうくこ二人りいこ坊で寂滅実ふ者ら
び友達のよう〜こ恋ひ合而と生碎いか性遠こそ
深きこりい志つくわらアゆもうんぞ〜て逃出〜てに
の嶋とび拭てこづ恵ふ子里とをのたと〜後こ〜ひづ
重役の耳かこいて二人りい逃敵上方箱とんざ〜。源

谷の宿ぐ〜おおに別まこく。丁亥今年い十手めぞぜ
伸「月日の立のい疾りのヨ源行年豆と
出るうち矢ッ法ことの姫うら執着と組とで次第ヨ「自己も
京大坂とおい年こづ中くい法ぞでんこ重ふ豆女いっんあさ
らるぞ」伸「ところづ助ふるりのぞ今自己づ組ふの姫
田要人とらふ奴の女房ふこ時の臨ふ所と三ッふ割ぞこ伸ぞ
「此ッよ性ても乳づるんこ。こうして主とぞうあこのう」ぞうう。
志ようと種〜に法とうこづ行ふも行人の南人づふ知んぞ。

はじまられぬ。「昔うゝ今のうてあふうけちやァあまさい役者ヨまぜッけをるさうしてまおいの亜（徒）のご」「何亜と言ッて別ふ者もれぐ」
「此夜い郭内」とゐるつうりごう。徒さん昔のよ」をふと」
だろう惜て呉れぬ。「途中のうそ」「れ合も世ごろゝ色と知ッて」
て亜ゝ呉ひ」「ゐんごゝリヤ考ふう。ヲイ常就ぢやァれぬ」
考分ゆりの金ごり」「うておちふまとさけて彩むべら」
「様ゞあるりのう」「コろゝれぬ」「奴どやァれぬう途中のうそ」「れ合ゞ」
ゐいとらふふ」「れ合ゞるきやァりらひまとまん」「ふ彩えるゝ」「ゐて」

「呉ひ」「今考分ゆりの月今されぬ合いゝ紙ぬやト大地ゝ彩（徒）ゆりけゝ」「忽」
「体れ見ぬ見でも天うの亜ゞ夫ゞ多ゝ強ゝうゝ達者で居ゝ」「ヲイ」
「徒者の紙夫ゞ多ゝどうでも呉れ」「ナ呉られるゝ考ア夫てゝ」「迄」
「後悔とゆるナ色者ゞ見ゝう徒亜ぬ沈の端の徒者ゞ活家の」
「お民の有ごろゝ何ゝ彼ゝ色者の四亜ゞ徒ゝ本の面義」
「考ゝまれらア見ゝ考多ゞれ」「徒ヤイ徒」「ゑんゞ徒ゝうゝナア」
「自己のゆう徒」「お彩ヨゆうゞれ」「亜ゝゆ式いちゝゆれゝうゝ」
「見ゝゝ宜ゝうゝ不考でも負て亜徒」「どれゝゝや。」

コリヤ十両ばかりも二分金で二十郡有疾くく切きりく出し事
自己も否る文句式いふ乳もあるうさ体「ざぶ。どうして魚沈
の湯のお民が不(ヘば)従る戒知らるのぞ」「恐怖をいふて地の尼
を抱ぎコウト泣テヨっさうく十一日の夕ぐさだ。今も赤ん坊が
いふ通り波の渚竹で荒海戒体うと云さア娘ふ生
家しといふ挑物ばかりも二人旅ぐ来ぬ取ってけ前の
挑物をすんなり女子の事元腹孫うは性のハかーなれい為らい
たが抱て寝る事夕咎望其沼ばうは性驚戒ばして

ばうばうあんぐ二人のうちの兄ざうう。どんな悪ぐ性戒自
由ふ出るうと見て出ばうと。いうざるお世話を強物抱のあかう
海戒身て寝て池の湯て下帯をえさうびっうお前ばうう
そう時すぐふ中湯の三次の波ふ出うけ事と思うさが更ぐ事
世験うう上面で抱ぐ戒ぬ(ーと驚結床)おけ迎こで
すうう種戒あげ中ーさ性ばうれ(のハ事元後のヨ体く本の
部屋一の四間室とうさばりで何度ふ出前ふ寝て居るの
うしと。さうばり抱ふ前ばうれるんぐ前のことばふ抱ことと法も

ちんぬし
をばさんを
さ
ゝらどんな
ものでも
いやがらん
三まん寿

くいさが。えんどんの為人ぐ不義知とらふのですあり。とうり申しく
作「そんなら人今日自己の出るの成▲「来刑時ふうと活て来申しく
作「とり申ア出若芳であつくさナ文ア家で別れ申ア彼出ア
久留で坂の方へ従人とる七曲角ア彼奴を変ア国
ま先るだんびくを接ま申ア元せく切つく出べ▲「や。人数ト
りぐくを毋ア上と作六ア出て出ア切ア肩先ア乳の下かけく
切さく出べアルトなりア自己ア彼ア作出ア出て情申成さりて
仲の十郎成五郎ア作ホルト見作「コイツを。なア世の中ア

後陽いのの八郎作不思議の八お民ア宅ア綾ちつがち義ア
お出ア上アノ刀ア作りア出ざとアいふとざが。とうアの成色上えん
人のざ文ア上ア出ア出ア出ア来いとの多ア名ア多ア
出ア宰成ア出ア寄ア出ア人多ア祇刀ア民士の縄と紙云ア
ア出ざ自己の縄でさ作ア出ア出ア作ア出ア書八ア出
ぐんぐんぐ。ついて出方ア出ア出ア作ア箱人をのアア先二ア
と背の仁ア。うまんア成ア人ア作ア出ア出ア出ア
歩行た右ア豆ア出ア作ア「ぐどやア源次郎ア出ア作ア

いせ屋に自己故ふ世年月の憂患雖招く事も大悪人
幸八「活て久しき山住徒表我親子の来世の業ひ取て来る
ぎんとさぶ定家の者ども人と思ひの外ふ海が仕業更に我世の
物思ひ。ふるふ今を去る四十年のむし海竹あく女とら
「荒濤ふ及ぶんと為せ事和く奪り合せくせひるくも切
敷なせ一悪者い外新次定家の者人ありと呼ぶる嫁
しさ不仮ありきと年久月日思ひ一ふも変に時れ
たり宮ふも天命のがれぬ。イデ出行の有様式うさき

体「思く愛歌ふ入り流深ふ文の故見えでし嘆く晒て
気示玉物の一刀も盗一二人が海の手ふかつて死れば
月業月沼新式情「き覚ひ知ねく後「四ア沈長ふ源次
舞表ふ命を教しる例ふ落散ある一刀名紀
祢ど親くより譲りを情一我部の什物同時ふ失物色
たる式死鞍の例ふ捨ふ見ひい我こを人を教せしとりね
ふ分りの自己が廉忠見でも色ふ染ずるの式「君仮と
幸阿伝吉が後亦とぞりふ美をべちらねば先変引

出しふありしかを見る時新を暫く達てのあを折り拾
と云ふ一丈より五尺の海光屋にて「宮侍」と後ち
きんぐ長成んてやう紙の通り民「夕飯も」ふを作ふ賀を
乗せて四ツそも「四つもの根掌」暫く青菜ふ浦と青
うをぐれ書「顔も」孫ぐお富さんふ富「俄婦」き横さんが
自己が意成かる「んと世名あ「世」のくなくぐ宮侍と現至
兄の俄「侍」十二兄の歌ふ民「君侍ふ」浦意意ふ人が姫表
意神ふ人亜の婦「サク寿常に「勝負く」侍「新なる

うふ何も波も云て世ふ人以前ふ人以前元が面来者
俄侍者と長着宮の澤の柱如ふ別深金につまりく
右田ふ新りのふ汐を集ふ質入せんと思ひしふ稲表
しく文さうふ人を内紙の張舎主書汲月の義度ふ幸
八ツ門最掛ひと世氣係ようさを後根次定ふ郎多
義ふ人どの朋友と波浦系の親世書ふ浦て帰る表ぐら
お浦ふ娘「智りのうの門くよのふ知もうかれ定ふ中張次
を亜ふて深「巴そ深さまんと思ふ亜「ふ侍者あもうね

肩関ハ幸八郎と夢ものがたり聽病風ハ後引まそ
迎てこゞ今更ハ情。積る悪事ハ風浦ハ排りれせんと
色ハ後ものがたりて代とりて張るうちまさも法楽ゞを
番ハ遠ひんをそゼど表ものと野の相撲ねを
うちハとゆりをつけて名ハ熊谷ハ熊谷ハ法ゞつより
を時いるまも後ものがたり大事ハ受けるゞ腰を落るも
業物とゆゞまに盗ゞしを業物で表ものを尾よく
教ーハものしてゞ人やものとおどろかれ、並て迎ものゞ我張ト

是より二編ハ編ハあり仕「お活といひ法楽お家ハ後ゞ
ものがたりてまこいゞ
如ものおとものゞ月ゞの仇敵丁色サ余りて情ものゞ百倍イデ
ハ行の四郎兵衛させんと云ものゞ
ものをゞ先をひゞき同ゞくものと後を落し暫時ハいゞ
戦ひゞものゞりを孫の妻八ハ敵ものるものあるべき。ものゞく
くと信者ハある兵法深ゞ後より腰のつゞを切つくまハ
アウト斗りハ信兵ゞものあゞ兵衛八ゞ肩ものゞ同ゞけ物
おハものゞものおゞ眼もものゞ抜ものゞを思ものも大地ものり

投打うり安田を。ソレト垂髪中ふ脈ムでせるもせび脊ふ屑ー
表松ふ波安源の二刀ふ拍原うせて後ちつが親の歌と切法く
さべら人の師弟の一回ふ右ひぐうり切分て源石ふ歌の
徒六ち人事の痛をふなまりうる室をつんで七頻八例書八
中をう徒六ち表ふ一日を表ふ板ふげ月のあり次すもとをまさび
探武弁ち展垂ふ表ふげ武ふ拍源て徒六の後ふ過を利ぐうり

## 第六回

かるふうう紫ふ二捉いたせきさ人へ早ふうせびちづく出来る

笹岡要人今一人ハ大江の近臣安田ゲ一郎岡崎を張るより
事人ふて武実事一要人ふの外ひ易ふ為ふ徒六武
こ肩見とふびた出ち尾絵本武とげくるのを汚名
を信ふ表ふ事度我を表ふ廃ふ波し
なー悪人ぐうち人をふ申ふし甚羅ち仕事八ゲ外ふ引徒
んイザ出滝月武ちもん要「天晴ちる口覚ふ拍るくふ波の
徒六ゲ四悪武敏ち表ふ浦く拍ませのひ永の脈とうちう人
武実事ち禁ドうれび為所安岩の徒六武をふかけーそ

多
撫ひ色紙こそ付色およ掛く「ゆづりや葉八度そこ元
帳とうこ色後波緒右京義先金義光出奏世張浦
嘉宝浦八浦州と往来の路成捕荒濱成なんとてそ
果さづ制定ゆ結次いと場ふ付れ緒右京義八注異も
逆高色ゆとも度の山耳お入るより中附屋とゆたりしゲ
海ゆて度も玉沙の刀紙矢色うしはきしくはも緒右ゲ
仕業ゆうんと山附山嘉成遠ゆ色を屋海新ぎれ
先喜て御先祖匠房の山を意ふあうゆ成ゆく下



ゆうんとふ表ゆうゆ作ゆされしゲを注山色ハ行ゆふ
ゆうしゆ者て行ゆ者のされれハ力及を歩すゲ笹田氏
とハ故ゆて山色を成ゆびゆう山色のる成易ゲを
山色尚ゆ山へいとお教ゆ中せ河を八反言ふきれ注ゆの
約束色へ山紙あて多ゆくとゆるの教山辺ふ色うる
一紙一竹を掛ゆれ緒ふつゲる才の紙今の名ハ黒ふ
緒六波曲者成付ゆ山ゆ度ゆ密くゆ成ゆ度ゆ
上て要人度と山国緒ゆ「ゆく者元要人格の山ゆひ

自己滅亡して切腹せ―彼の者人を以て為れば青雲の
志を捨て古傳都と為して計―ハ是のみが我一生の誤る
歌うれぞ吾ハ後彼を行を盗まんとも因て為ること多
後ふ不忠の曲者為れば計らべ計らべ公の多年信ずるが
義のひとり自己ハ是より立場殿（言上）日あらべ
本地をやさるべき西法有しを時ふ彼を汚をあ
幸「コハ罪を知らべ法若よりるふ桃太郎「お新ことて
一家のよう自己まる結ふ推参せん幸「是ろ

ふ寺宗大江家の屋形くそへ帰りれ行ふ要人をあるさを
見帰り要「イヤナニ安田氏悪人ぐら使ゑを婚附ありとも
一ツ縁組給しうふ已敵いが吊ひはさせんと云ふ敵用を
の桶を拵ゑせり竟ぐいふ思ひるや後「諸相いどうう。あう
祢ど西後要悪のお取扱ナニ屋ぐりまをう氏「名御どの
取ふけくお世話ふあり」るもありたれあてやさうべ
那有うえど年志しあぐう要人居あへ玉用ふあくるも
面用あるしなど竟しく洞のう遠くう中そう伝もあ見矣礼



婦をとりつてお尾をべ中上そいとしさのくお用ふあくる文
を入宗へさくん居といふ我要人をお消て要「そうのるう
べお宗いふ云ひとし我ーませう絶る方ようぐうれりと
が都て速或西後お弱さんふあ細のる我ーて意そく
吵りあのさろう行附でもお前ガ同乗してお屋を連て四方戦
ト見より要八後ちつ法深在市ーあ行るんど諸安くふ
挨拶るし波の徒六ガ已敵いふ僕ふ云附揃ふ入さ也又
こそ連れと業物ふ渡れべ術る人さをお民ら遠一同

梅と
橘の
まつるひと
孫
ぎつく
屠りて
竹の陣
作者

不二を取り上富士一ツ
ゆるす文より四五日後大江部より妙法寺へ安田
幸八お弱法師とも立花方へ引越日あらば日蓮へも
願ひ入べく又ゆ市地蔵菩薩しゆく名も改め無たつ
孝義と号し近習の列あるべ下ふる命ゆ法深へ幸
八ゆ立花ゆ弟子なる日より後方ゆ後宿不立一ゆ
多く要人ゆ法名のごく表松を名乗人とし
森寺中ゆ法華と称し一ゆ弟ゆ後方ゆ後宿

弱屋孝義人の後嗣成り
とひろ此屋敷方へ要人を招ゆり仕り成て出
入を乞一ゆ千葉富山和田熊谷をこゝわして数多の
浮世も出来一ゆ以前不憚ゆ繁華とゆふつけくい
多代ゆ僕の十人ゆまりも抱一ゆ法深ゆ後れゆ不
しゆて お民と孝義中と嫁合せんと後方ゆ山幸
進一ゆ べきはじめの祝ゆ夫妻を迎ゆ杯とゆるゆ一ゆど
親子の名跡成立ゆ弟ゆ物の後見すゆとゆりでゆ

俗語も哀びことすれ昨まんと程尽して進わークへ
絶ふまを為ふ陸ひて他の端を分ふ優り去る中と
文婦ふ為り又世八妻去り即 奥八お武と万事と後又
なしうりれば益家富業多り文より前ふ要人の方
ふ八波の久尾が不枝して荷担さえも寄べさうしが消ふ
百ての僥倖ふて再度階老の数沙ふ多ば多ふ多也
うちふ絶機ふ之年の若四界も果ークが要人ふ浮ふ引
百ふ〜嘉と百せどお富と多之年百て時百度お富八

作者曰
百代武家を改めして深の脚ふ尾と果武
平ふ拾遺となしうく肴宮も出あられ鶴の後
宝橋春院が政談を天命院ふ後国しく遠ままさ
ふ編代大尾ふ〜法ぐいて出板いさうもべく 相も
都ふ〜ば法高 禅 帝上方

これ武婦と殺ひ織機を人とかーづ元ふに男
如のふ代まうけ之家いふく業ふとそ

五編六回の結局ハいよ〳〵入組し場の多く擾人なれバ
ちしかくんとて其日割を左に志るす也

一三月四日 伴六お民をすゝめしてお富が噂をよせし欝氣をはらし 一三月五日 伴六来りお民が宅へ来りて帝釋様の縁日に出会しハ此夜之 一三月十一日 とはずがたり伴六お富お民の夫婦をさそひ 来りと以ふ也此日の夜之 一三月十二日 お花之浦へ往く[illegible]お民が宅へ [illegible]其夜のことのよし八此日のこと之 一同十三日 又綾太が幸 [illegible]ニて 綾太郎[illegible] 要人[illegible] 一同十五日 これも本文にのせされたる宗旨寺にて清[illegible]の事 [illegible]一同十六日 要人天[illegible]の中見へ[illegible]幸八の[illegible] 幸八がお富に 伴あく[illegible]のお富お民[illegible]一同十七日と極め[illegible]

一同十七日 例の朝うちハ此夜おしてと縁が一同廿一日 安田幸八 [illegible]より一同廿三日 幸八本[illegible]縁安[illegible]せしハ此の日なり 一同廿八日 要人綾太郎[illegible]の[illegible]ハ此の日なり 一同廿日 お富が要人の[illegible]
一四月五日 [illegible]町へ[illegible]此日なり 一同十日 [illegible]綾太郎ハ一[illegible]
一同十五日 [illegible]の年季[illegible]此日なり 一同廿五日 [illegible]要人の宅へ[illegible]此日なり 一同廿八日
おふくと[illegible]ハ此日之
婚姻ありしハ此の日之

毬唄三人娘五編下巻 了